
翳した掌

鈴乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翳した掌

【Nコード】

N3381A

【作者名】

鈴乃

【あらすじ】

日本国には影と光の部分がある。その中でも、影の部分では大きく3つの群がある。その中の一つから、蝶が舞い躍り出る。それは、影の世界の革命を意味していた・・・。

葉に隠れるるは胡蝶の故に

「ろっ・・・」

ドタバタと、騒がしく長い廊下を走り抜ける一人の男が、いた。

男は日本人らしく、漆黒の髪の毛の色をしているが、瞳の色が透き通った灰色で、どこか、男の印象を神秘的に見せている。

「朗報！ろーほーだあっ！！」

長い廊下を、いくつも駆け、急な階段をその倍ほど駆け上がり、男はただひたすら目指す一室をめがけて走り抜ける。

周りからは、道を開けつつも、見知った顔の者達が「どうしたっ？！」とか、「やったのかっ？？」などと、声をかけられるが、本人返答する気も無い（というよりは、そこまでの気力に余裕が無いのであろう）らしく、片手で、周囲の人間を制して、走り抜ける。目指すは一室。最上階。

いくつもの、階段を駆け上がり、ともすれば、自分はいくつもの階段を上っているのではなく、同じところをぐるぐる回っているだけなのではないか（以前、本でそのようなデザインを見たことがある）とも、錯覚してしまうほど、階段を上りつめ、そしてやつつ、自分がかこまで汗だくになりながら、目指していた一室に辿り着いた。

「え・・・えふ・・・」

荒い呼吸のリズムを無理矢理整え、あごにつたってくる汗を手の甲で拭い、男は襖を軽くノックして、耳をすました。

中から、聞こえるくぐもった声。人がいることは、ソレで分かった。だが、である。

（・・・？・・・えふじゃない？）

聞こえた声は、ソプラノ。しかも、子どもと書いてガキと読む年齢ぐらいのまだまだ幼い声だった。しかも、女の子。

・・・確実に、えふではなかった。

えふは、もっと歳が上であり、しっかり成人式にも出たし、お酒を

飲んでも警察には怒られない歳である。ついでに言う、えふはソプラノな声など出せない（よくてアルトだろう）男性だった。

「入るよ」

（仕方が無い、声を出していないだけかも）

そう思いながら、男は襖を開けた。

「あれー？」

「・・・んあ？」

中には、畳に寝そべりながら、読書にふけている（髪の毛が淡いこげ茶色で、瞳も、髪の色に合わせてある。しかし、前髪がのばされているため、中々その瞳を見ることは難しかった。そんな、男）えふがいた。その隣には、ソプラノ声の犯人であろう、（セミロングの髪は、透き通った茶色で、光に照らされると、オレンジ色と見間違えるほど鮮やかであった。瞳は、男と同じく灰色である）ユノが饅頭を両手に一個ずつ（片方は齧った痕跡がある）と、目の前に置いてある大きな皿に4〜5個程乗せて、えふの隣に座っていた。どうにも、力の抜ける光景である。

「んぐっ・・・どーしたの？」

「・・・ユノは口の中のモンを全て食ってから喋ろーな」

「ん・・・。で、どうしたの？」

やっぱり、力の抜ける光景である。

男は、今までの張り詰めた緊張感がココには場違いなのだと確信し、緊張を緩めるように、ゆっくりと2人に近づいて、腰を下ろす。

「朗報なんです」

「ろーほー？」

何？何っ？？と、目を少し輝かせながら、次の言葉を急かすユノに対し男は苦笑し、言葉をつなげようとして、えふに妨害される。

「・・・ユノは喋るか、食いモンに手え伸ばすか、どっちかにしよう。ほら、饅頭が転がった」

「・・・むう。えふはいつもうるさいよー」

「ほう、そういうこと言うか？ふーん？」

「あ、嘘。ゴメン、すみません。お願いだからお饅頭かえしてーっ
つー!!」

(完全に忘れられてる。。。)

男は小さく溜息をつく。

「じゃ、後で来ますね」

「あ、いや。悪かった、今でいいよ」

「そーだよ、コン。朗報って、なーに？」

「「え・・・っ？」」

ユノ言葉に、部屋の空気が一瞬固まった。

ユノは、何故かたまったのか、分からず固まり。

えふは不意打ちをつかれたような、きょとした顔で固まり。

そして、コンと呼ばれた男は、顔を真っ青にして固まっていた。

「・・・ユノ、今なんて言った？」

とりあえず、といった感じで、えふがユノに言葉を促してみる。

「コンって言ったけど？」

何かまずかったのかなぁ？と、考えてることが手に取るように分かる表情で、首をかしげながら、ユノは男を仰ぎ見る。

「・・・コンって、誰？」

もはや、笑いを必死にこらえながら、えふはユノをさらに突付く。

隣では、次の惨劇を予想できたのであろう、男が慌ててユノの口を塞ごうとする。

「わっ！ユノ、ちょっと待っ・・・っ！!!」

「えー、そんなのバロンのことに決まってるじゃん」

ユノが、上手く男の手を逃れ、えふに返答する。

途端に、部屋はえふの爆笑に包まれた。

「・・・一つ？！ユノ！あれほど人には言うなって・・・」

「えー、『ナイトバロン』なんて、あだなっぽくて、ヤダよー。本名で呼んだ方が親しみ感じない？」

「感じないっ、感じない!!」

えーっ？と疑問符を頭の上に大量発生させながら、ユノはさらに言

い返そうとして、えふに遮られた。

「・・・つく。なに、コンって、バロンの本名なの？」

「正確には、コナンです」

「コン・・・ねえ・・・いいん・・・じゃ、ないの？コンちゃん・・・って」

「あー、もう。えふ、いいよ、声出して笑っても、良いから」

片手で顔をおおい、がつくりうなだれる、バロンを見てユノは心配そうに覗き込む。

「えーと・・・コン。言っちゃダメだったの？」

「そうじゃないけど、えふに言えばこうなることは分かったからね」

苦笑しながら、バロンは軽くユノの頭を撫でた。

一通り、えふの笑いが収まったところを見て、バロンは言葉を繋げた。

「で、朗報のことなんですけど・・・」

「ああ、そうだったな」

「・・・ユノは聞かないほうがいいかと」

ちらつ、とユノを見ながらバロンはえふに伺うような視線を向けた。

「えー？仲間はずれ？」

「や、そうじゃないんだけどね・・・」

「じゃあ、いいでしょ？何聞いても、おとなしくしてるって、約束するから」

「おい、お前ほんとに約束できるのか？」

えふが、ユノに慌てて聞き返す。

「む？なんだよー。それぐらいできるよ。ユノはもうすぐ10歳だぞー?!」

「まだ、歳一桁だろーが」

「もうすぐ二桁ー」

「・・・では、2人とも、静かに聞いて下さいね」

バロンがそういって、二人の言い合いをおさえた。

「実は・・・姫が家出をなさいました」

しんっ、と、静かになった部屋に一言バロンの言葉が零れ落ちる。

ヒメガイエデヲナサイマシタ

何故か部屋の空気がすうっと、冷たくなっていくのをえふとバロンは感じた。

ふと、ユノを見ると、ユノは弾かれた様に窓に走っていった。

「ちよっと、待ったあーっ!!」

慌てて、ユノを押さえ込むえふ。

そうはさせまいと、必死に窓枠につかまるユノ。

「はーなーせーっ!!」

「はなすかよっ?! ってかお前、今何しようとしたっ?!」

「ゆみこを連れ戻しにーっ!!」

「どこからっ?! 今、まさに窓から飛び降りようとしてるように、お兄さんには見えるんですけどーっ?!」

「いえっさー」

元気良く肯定するユノにえふはアホかっ?! と怒鳴りつけ、窓枠からユノを引き摺り下ろした。

「もうすぐ、二桁の歳になると、威張ってたヤツがどーっして、窓から飛び降りようとするっ?! おとなしくしてるって約束はっ?!」

「前言撤回」

「なあっ?! お前、そんな言葉どこから覚えてくるんだよ?」

「えふから」

「くっ・・・」

今にも噛み付かんばかりの勢いで怒るえふを、まあまあと宥めながらバロンが口を開いた。

「朗報は、ここからなんですよ?」

「ああ?」

「えー?」

二人の疑問符を軽く無視して、バロンはえふに尋ねた。

「どうしますか？えふ」

「え？なにが？」

「ユノは、これ以上野放しにしておくと、この13階から、飛び降りかねませんよねえ？」

「えっ・・・まさか俺が行くの？」

「正確には、ユノについてく保護者的役割ですけど」

「はあ？とあからさまに拒絶に態度を見て、バロンは丁寧な、ユノを指差した。

指を指されたユノは、胸を張ってそれに応える。

「いーよ、えふなんかこなくたってさー？ユノが一人で行くよ」

「・・・はい。分かりました、行って来ます」

えふの即答にいかにも不満そうなユノと、満足そうなバロンの顔。

かくして、えふは『姫☆連れ戻し作戦』のメンバに括られたのであった。

葉に隠れるるは胡蝶の故に（後書き）

新年に入ったから、調子に乗って新連載☆って言うわけではありません。決してっ！！冬休みだから、頑張っってwwでもありません！・・・多分。

さてさて、こんな変なテンションでいいのかという、ツッコミが出てきそうですけれど、やっとこ出しました、新連載小説！もう一つの小説も完結してないっていうのに、出しやがりましたよ、この子ったら！！

そして、例によって例の如く。いつものように、プロットとは反対方向の話の進め方をしています、この作者。ホント、自分に手を焼いております（汗）

蝶は一羽って数えてよかったのかっ？！まあ、様々な面で不安が残る、新連載の記念すべき第一話ですが、ここで呆れず、諦めずに読んでいただきたいと思います。

ではでは。

最後まで、（こんな長い後書きも・・・）読んでくださった皆様に感謝・感謝ですっ！！

これからも頑張りますので、叱咤激励、ご感想、誤字脱字等の指摘やご評価がございましたら、どんどん言ってください。

里より出ること、関の声とし

現今、日本は光の部分と影の部分があった。

光の中では、犯罪が急増し、しかしそれでもあえて国民に公にできる、ある程度の人の生活サイクルというものが成り立っていた。

影の部分では、ソコだけが時代により遅れた、時代錯誤(anachronism)となった、もはや常人では生活が成り立たない。逆に言ってしまうえば、常人ではない人々の集まった、そんな日本の光からはみ出したトコロだった。

影の世界は3つの軍から、つくられていた。

力の南軍、知恵の東軍、そして、それ以外のはみ出しモノ。もっとも影の世界に馴染みすぎている胡蝶の里の軍。

そして、先日。

胡蝶の里の中で、花卉が水面に降り落ちるがごとく、舞い踊る一羽の胡蝶が一つの波紋を影の世界に広めた。それは3つの軍の平穏を乱すほどの大きな波紋となり、振るえわたった。

『胡蝶の里の姫の失踪』

これは、未来の影の統合を意味していて、また影の世界の崩壊の始まりだということを、ここで誰が予想していたであろうか？

十 十 十

「じゃ、行って来ます」

「いつてきまーす」

春先の早朝。まだ、いかにもかったるそうな声と、反するように明るい声が、胡蝶の里の門から響き渡る。

「なあ、ホントにお前は行かないのかよ？」

えふはげっそりとバロンに問いかけた。

バロンは何を今更とでも言うように、平然と言い返す。

「里の中心人物3人が里を出てしまって、一体ドコの誰が里を治めるというのですか？」

「・・・あー。そっか。副長のお前しかいねーのか」

そのえふの言葉にバロンは待ってましたとばかりに、えふを突つく。

「まったく、なんで長が3人もいるのに副が1人何ですか？」

「俺に聞くな。第一、本来は1人だったのに、姫の独断だけで「増やします」って一言で馴染んじやっただけで、本来俺が副だったんだからな？」

「ゆみこは悪くないよー」

えふの言葉に納得できない、と言いたげにえふの服の裾を引っ張りながら文句を言う。

「・・・。」

一瞬の間。

（（そうだ、コイツが3人目だっけ・・・））

バロンとえふは、内心大きく溜息を付いた。

ユノの敬語の使い分けが出来ないばかりに、長にまで引き上げられたのだった。

仕方ないといえば、ソレしか言えない。なんと言っても、ユノはまだ一桁の歳だ。それは、これから、相手を敬うということを学んでいかなければならないということ。しかし、影の世界では、教えてくれる人がいなかった。

教える人がいないのに、敬語が出来ないと蔑まれたことに、見かね

た姫が無理矢理長まで引き上げたのであった。

当然、ユノは姫にも敬語はなかった。

それが良かったのか悪かったのかは、判断しがたい。とは言え、姫が満足しているということから、掘り起こさないという暗黙の了解となつて、里に広がっていた。

そんな、昔のことに二人が思いをはせている時、ユノだけが、ふと、閉じられた門をみやり、再びえふと、今度はバロンの裾も引っ張つた。

「・・・ねー。出発って今日じゃなきゃダメ？」

「お前が早くって急かすから今日になったんだろ？いきなりどうした？忘れ物か？」

いつもの、のんきなユノとは違うことを見て取ったえふが、しゃがみ込みユノの顔を覗き込む。

「忘れものじゃなくってさ・・・。門に今日は近づきたくないって言うかー」

「門？門の外に何かいるんですか？」

バロンがユノに確認を入れる。

それに、多分。とユノが頭を縦に振る。

バロンは素早く片手で合図を送り、柵の裏から外を見に行かせる。まもなく、視察に行った一人が血相を変えて走ってきた。

そこまで、声を大きくすると門の近くなので聞こえてしまうと懸念したのであろう、小さく視察がバロンの耳元で状況を報告する。

それを聞いて、バロンがなんとも微妙な表情を作ってえふを見た。

「・・・東軍が、門の向こう側で待ち構えてるってさ」

「さすが、『知恵の東軍』だな」

えふが嫌な表情を隠そうともせず、嫌味を呟く。

情報が流れていることは、予想済みではあった。しかし、行動が早すぎる。

「ねえねえ、どーしたの？」

言い出しは自分であるはずなのに、まったく状況がつかめていない

ユノが改めてしゃがんでるエフの服の裾を引っ張る。

「喧嘩」

えふは、即答した。

途端にユノの目がきらんと光った。

「行っている?！」

「いいわけねーだろっ?！」

「どうぞ」

えふが激しく否定すると、バロンがにこやかに肯定するのはほぼ同時だった。

「相手は『知恵の東軍』だぞ?! 里の皆のように命までは取らないよ? なんて、甘いもんじゃないんだっ?!！」

「でも、えふ。ユノの戦闘能力には、確か一目置いているんじゃない?」

「コンちゃんは黙ってる! 第一、ユノになにかあったら、後で姫に殺されるのは俺なんだって!!」

「それじゃー、ゆみの方が東軍より怖いって言い方になっちゃうよー」

「なっている。大にいい!」

「全然良くないしー」

また、言い合いが始まりそうな雰囲気をつかみ、バロンは仕方なくと言いたげに溜息をつきつつ、まあまあと二人の間にわって入った。

「ユノの好戦的な性格は、ちょっと今回はいただけないな。帰ってきたら、俺がいくらでも相手してやる」

「・・・ホントに?」

「多分な。じゃあ、えふ。里の予備兵出して相手の気を引きつけておくから、裏から出て」

「おいおい、予備兵だけでいいのかよ?」

心配そうに、えふはバロンに問いかける。

バロンは、えふの心配なんてどこ吹く風とでも言うかのように、し

らつと応えた。

「胡蝶の里は、西軍と北軍の交じり合ったもの。2軍に対し、1軍が勝つわけないでしょう？ どうせ、ただの挑発です。敵の数も、予備兵で十分な程度ですし……」

「……相手いくら？」

「ざっと見て、400人以上」

「ちよつと待て、バロン。計算おかしくない？ ウチの予備兵の数って確か……」

「20人でしたけど？」

単純計算で一人割り当て20人と、少なめでしょ？ と、爽やかに笑うバロンの顔を見て、ユノとえふは自分がバロンの敵じゃなくて良かったと、心底思った。

「では、行つてらっしゃい」

バロンはあらかたの作戦を予備兵に出し、配置についたところでユノ達を裏門へと連れて行つた。

「ねーね、コンも戦うの？」

ユノの心配そうな顔に、バロンは一瞬答えるか戸惑い、しかし目の前で、答えを待っている子どもの期待を裏切る勇氣もなく、渋々といった感じで答えた。

「ええ、一応予備軍のリーダーでもありますからね」

「はん？ 副長は仕事が重なっているんだなあ」

えふのからかいに、本当に。と苦笑しながら、バロンはユノに笑つてみせる。

心配そうにバロンを見上げるユノは、笑いかけられ、仕方なくさこちない笑顔を作つて見せ、一気に裏門を潜り抜けた。続いて、えふもユノに続く。

「じゃあ、頑張つてね」

ユノの言葉が終わるか終わらないかといった時に、正門では鬨の声が鳴り響き、裏門は硬く閉ざされた。

里より出ること、関の声とし（後書き）

第二話にして、ストーリーのスピード早っ！！と、自己ツツコミを入れてみました。どうも、鈴乃です。

さて、この物語のキーワードにちよつとイタズラしてみたり、やっぱり自分の書く小説の分野を見抜けず、「その他」に逃げてしまったり、いつものようにプロット脱線を試みたりと、違う意味での冒険が含まれています。気にしないで下さい。ツツコミが入りますと、自分、激しく落ち込みます。（全てが全てとは言いませんが、ほとんど無意識のうちにやってしまっていることなのです！！）

さてさて、次話からは、（もう、既に暴走していますが）ユノを暴れさせるつもりです。頑張れ、皆！・・・とキャラに呼びかけてみます。

さてさて、そんなこんなで（どんなでだ？！）ようやく2話目が終わりました。

最後まで読んでくださった方々に、いつもにも増して感謝・感謝です。

これからも頑張りますので、叱咤激励、ご感想、誤字脱字等の指摘やご評価がございましたら、どんどん言ってやってください。

敵より味方と思うところに

「・・・ねえ、えふー」

裏門から、胡蝶の里を出たユノとえふは、東軍に見つかっては、意味がないと、姿勢を低くして茂みの中を歩いていた。

ユノは、その場にしゃがみ込み（一応、周囲には気をつけているのだろう）、前を行くえふを呼び止めた。

「ん？どうした」

えふも、ユノに習いしゃがみ込みながらユノの方に向き直る。

「コンのどこ行きたいかもー」

ユノの爆弾発言に、えふは一瞬その場に崩れ落ちそうになり、慌てて体制を立て直す。

「んなっ？！・・・あのなあ、ユノ。何のために、裏門からの出発か、意味分かんなくなるだろう？バロンは、こっちに東軍が、気付かないように、あっちに戦力を集中させるように仕組んでいるんだぞっ？！それを、みすみす・・・」

「だってさ、だってさあ」

話が長くなりそうだったえふの口を両手で一生懸命押さえながら、ユノは言い返す。

「そんなことしたって『知恵の東軍』でしょー？絶対裏門のことにだって気がついてるよ。逆に、そうじゃないと不自然じゃないー？」

「・・・つぶは。結局何が言いたい？」

ユノの手を払いのけ、えふはユノに結論を言うように促す。

「うん。もう東軍に囲まれちゃってることだし、茂みの中だと、矢とか打ち込まれそうで、分が悪いからさ。どうせなら一気にコン達がいる正門まで、一気に張りぬけて、合流した方がいいんじゃないのかなあ？って言いたいの」

「・・・囲まれてる？」

そして、えふは相手に悟られないように気配を消して辺りの気配を

探る。

(・・・6・・・いや、7人か)

確かに、2人は東軍の7人にいつの間にか囲まれていた。

東軍もそれぞれ木の陰や茂みの中、木の上など、様々なところに身を隠して気配も消して入るが、隠しきれない殺気のみが僅かに流れ出て、この場に何とも言えない緊張感を漂わせている。

「・・・なんだ、ソコまでの腕の持ち主じゃねーじゃん」

「えー、そうかなあ？ ユノは上出来だと思うよ？ 新人にしちゃあね」
ユノは、まあまあじゃない？ と首をかしげる。

対するエフは、ははんと軽く笑い飛ばす。

「基準を新人にするな、バカ。第一、ユノに気配悟られるようじゃ、まだまだなんだよ」

「えー、それって私基準ってことー？ なんかムカつくかも」

声が聞こえてないにしても、ユノののほほんとした空気と、えふの軽い空気が伝わったのだろう、敵に戸惑いの気配が漂い始めた。

「じゃあ、行くか？ 仕方がない」

「やったー！ だから、えふ大好き」

「折れるからってか？ なんか、あんまり嬉しくない言葉だな」

「そー？ ま、いいじゃん。行こうよ？」

ユノがそう言い、2人は目だけで合図を取り合い、次の瞬間、同時に走り出した。

十 十 十

「ふう、こんなもんかな？」

バロンは、最後の一人の首に軽く手刀を入れて気絶させ、地面に男

を伏せさしつつ溜息をつく。

（なんか、嫌な予感がする）

最初は戦闘中にふと、そんな気がしたから、少しは身の危険を本能のどこかで捕らえたのかとも思った。

だが、戦いがあらかた片付いても、予感は消えるどころかどんどん大きくなってくる。

「それに・・・」

9つの気配が、凄いスピードで、こちらに向かってくるのだ。

しかも、ほとんどの気配が死に物狂いで、だ。

「コンーッ!!」

そこまで遠くない距離で、ユノの声が聞こえた。

（背後かっ?!）

バロンは慌てて後ろを向く。

と、同時にざあっと、今しがた戦っていた東軍の連中と同じ身なりの者達が、もの凄い、同情したくなるような必死の形相で茂みから出てきた。

「んなっ?!」

驚きつつも、東軍なので、遠慮なく手刀でツボを突き、体の自由を容赦なく奪っていくバロン。

バサッ!!

（新手か）

遅れて、茂みの中から飛び出してきた人影に手刀を入れようとした、その時。

「ちよっと、待ったーっ!!」

つい先刻、裏門で送り出したはずのえふの声が聞こえ、はあっ?と一瞬、疑問符を浮かべたその隙に、バロンは茂みから勢いを殺さずに出てきたえふに体当たりされ、バランスを崩した体を最初に茂みから出てきた人影であるユノの踏み台にされて、勢い良く地面にス

ライディングした。

「よっと！」

小さい掛け声と共に、ユノが綺麗に地面に着地する。

ついで、バロンの耳元にえふの声が響きく。

「ってー……。危なねーなあ、ったく副長さんはよー？ 長のユノに手刀入れようとしたろ？！ お前、俺が体当たりしなきゃあ、姫のお怒り大セールの渦に呑み込まれてたぞっ！！」

「……。」

（取り敢えず、どけ）

バロンは、本気でそう思ったが、上に乗っているえふは気が付いていないのであろう、まだ、話し続けようとする。

一瞬蹴りどかさうかとも、思ったバロンだったが、さすがに長に蹴りを入れるわけにも行かず、仕方なくユノに助けを求めた。

「……。ユノ」

「いえっさー」

ユノはバロンの合図を理解したらしく、元気に返事をしながら2人に近づき、バロンの上に乗ってるえふを、両手で思いつき押ししてどかした。

「ほーら、えふってばー。コンが重いって言ってるよー。早くどきなよ」

「うお、痛っ！！」

押されたえふはバロンをはさんでユノとは反対側の地面に尻餅をついた。

ユノはふふんっ、と得意げに、恨めしく睨むえふの視線をかわす。

「えふが悪いんだもん、自業自得だよー」

「はあ？」

自分の悪行に心の底から気付いていないと言いたげに、えふは首を傾げるが、バロンとユノはさらりと流す。

「うーん？ コンってばこんなに相手してたの？ ずっるー。私だって喧嘩したかったのにい」

ユノは折り重なって山になっている敵たちを見ながら言う。

ユノの問いかけをうけて、バロンは思う。

（果たして、長さが不揃いの多数の刀を前にユノが喧嘩を出来るのでしょうかねえ？）

仮に出来たとしても、バロンとえふには笑顔でそんな危険な場所にユノを送り込む勇氣は無かった。

「ところで、ユノ？どうして茂みから出てきたのです？私は裏門からお2人を送ったはずですが？」

「えへへ。気になってねえ。それに、敵に囲まれていたんだもん」胡蝶の里は深い森の入り口にある廃墟の街である。

まだバブル経済が健在だった時代。

森の近くに、テーマパークじみた街を作ろうという無謀なプロジェクトが立ち上がった。

しかし、作りかけの建物が多い中、バブルがはじけて景気が落ち、自然とこのプロジェクトも消滅した。

作りかけの街は影の世界で売買され、今の胡蝶の里として新たな生活サイクルを見出して、それが現在のユノたちが住む場所となっているのである。

街の周りには約7メートルほどのコンクリートの壁が設けられ重々しく、里を外界・光の世界から隔絶している。

街の裏は例の森となっていて、小さな裏口も隠してあるのだった。

「あんな、分かり辛い裏口をこんな簡単に見つけら手しまうなんて。今度からは、もう少し、門番をつけるか交代制度を作って強化しておいたほうがいいですねえ」

「ところで、副長さんよお？」

バロンがぶつぶつと、一人思案に入り始めたとき、えふは辺りを見回しながら声をかけた。

「20人ほど、里の奴ら出したんだろ？見当たんねーんだけど」

「ああ、それなら全員探索に向かわせました。まだ、林の中に東の方々がいらっしやるかもしれませんしね」

要は。

手酷く傷を負わせ、それでもなんとか逃げ切った東軍の人々を捕らえておこうと言う話だ。

胡蝶の里は、もとより「殺す」と言う言葉を少なからず疎遠にする風習があるため、傷を負わせたのに林で倒れてもらっても、後味が悪いと言う言い訳のもと、そこら辺に落ちてる方々を拾って介抱し、正式な手続きを踏んでもう一度東軍に返すと言うコトをしてやるのだ。

胡蝶の里では、それが「いいことだろ？」と思っていても、他の軍にとってすればもの凄い屈辱になっていたりもするのだが、まあ、それは置いといて。

屈辱とは無縁なユノは、すかさずこの話に飛びついた。

「あーっ！ だったら、私も行くっ」

一度、この作戦に参加したことのあるユノは、人を引きずるという趣味を作戦内に見出してしまったらしく。また、やりたいといつも姫に訴えていたと言う。

そして、今が格好の時だと思ったのだろう。

えふが静止の言葉を発するより早く、ユノは林に向かって駆け出していた。

「あぁっ！ ユノ、ちょっと待て・・・」

「遅いですよ、えふ」

「・・・分かってるよ」

「まあ、えふアレですよ。アレ」

ごーん。という効果音が似合いそうなほど落ち込んでいるえふの肩をぽんっと叩いてバロンはにこやかに告げる。

「姫に怒られるのだって、単独より団体の方がマシでしょ？」
曰く。

バロンにも、姫に怒られる要因があったらしく、仲間ができて嬉しいとのこと。

がさがさと、深く多い茂草を両手でどけて進みながら、ユノは鼻歌交じりに思った。

（へっへー。えふが待てって言うより早く出てきたもん。今回は怒られなくて済むねえっ！さあってと。今回は誰を引きずれるのかなあ？）

その考え事は、とてもではないがもうすぐ二桁になる歳の、幼い純粹無垢な少女の思うようなことではなかった。

そんな、不吉な鼻歌を撒き散らしながら、ユノは林を進み程なくして、倒れている男性を見つけた。

「おー。さっそく、発見☆とは運が今日はいいなあ・・・って、んあ？」

男性を覗き込んだ、ユノは思わず息を呑む。

（酷い・・・）

それが、一言で言う男性の現状だった。

刀傷（バロンは刀を基本的に使わないので、恐らく別の里のものであろう）が数え切れないほど突いた体は、来ていたのであろう服を真っ赤に染めて、元の布に染色された色すら残ってはいない。

明らかに見ただけで分かるほど酷い出血量だった。

（取り敢えず、出血止めないと）

ユノは腰に巻いてあった黒い自分の背丈の2倍ほどある長さの布を裂き、男性の止血に取り掛かる。

脳への血の巡りを止めないよう必要最低限の血の巡りを確保し、止血が終わった頃男性は小さくうめき声をあげてうっすら目を開けた。男性は、その漆黒の髪をは似合わず、灰色の瞳の色をしていた。と、

ユノも最初は見て思った。しかし、男性はちよつと特殊にも、左目を灰色、もう片方を漆黒の瞳の色とし、見るもの全てを固まらせてしまう、不思議な色だった。

「あっ……」

ユノは、慌てて男性の顔を覗き込んだが、男性の双方の瞳は焦点を定めてはおらず、ただ何かを懸命に呟いていた。

「……？」

その呟きは声がかすれていてとても聞きづらく、息とともに出されていた。

ユノが耳を近づけて、そしてようやく聞き取った言葉の断片。

「こちよう……さと……連れ……くな」

胡蝶の里へは連れて行くな。

その言葉は、ユノの耳にしっかりと残り、とてもではないが里へ運ぼうとは思えないほど重々しく必死な響きが含まれていた。

「……引きずるのは、またおあずけ？」

残念そうに呟きながら、それでも瞳にはしっかりと楽しげな輝きを宿しつつ、ユノは男性の両脇を掴み、林の奥へと、短距離ではありながらもしっかりと引きずって行った。

敵より味方と思うところに（後書き）

ふう、やっと3話更新です。

いやあ、書きにくいですねまさきようさん。

動かしやすいですね、ユノさん。つか、引きずるときに足を持たせなくて本当に良かったと思います。

もし、足だったら、引きずることに木の地面からとび出した根やら、岩やらにまさきようさんが頭（主に後頭部？）をぶつけてしまうところでしたからね（笑・・・って書きたいけど、笑えた人は凄い。と言うほど笑えないトコロ）

今回は少し、スピードのある行動を文章にするところにこだわってみましたけど、自分自身の中では玉碎です（苦笑）

ではでは、いつもながら、まだまだ完成品とは思えないほどの未熟品を呼んでいただき、本当に有り難うございます。

つきましては、ご意見・ご感想・誤字脱字等の指摘・叱咤激励等々まあ、色々と思うところはあるでしょうが、評価もしくはコメントのところを送ってやってください。宜しく願います。

p. s. 次回は番外編が入ります。

瞳の色はソラの色で

『灰色の瞳は呪われているんだよ』

外の世界。光の中にいる奴らは、みんな素晴らしいながら自分達を見る。

灰色の瞳は呪われた色。

それは、煙突から吐き出される汚染された煙のような色。

それは、白く淡いはずの雪が、排気ガスのために本来の美しさを失ってしまった色。

どちらにしても、綺麗では色ではないと、自分達でさえ、思っていた。

呪われた色。

それは、誰かが会えて口に出すまでも無く光の中にいる奴らの暗黙の了解。

それは、光の中以外でも、通用する、人々の常識。

俺は、そんな色を。

あの子だけは、笑いかけてもらったこの色を。

嫌うことは出来なかった。

＋
＋
＋

「また、起きたらっ！」

うつすらと目を開けると同時に、誰か、幼い少女の声が聞こえた。その声は、感嘆のような、安堵したような。全く敵意の含まれていない声だった。

林の中で気絶したはずの自分は、最初に目を開けたとき、周囲の暗さに変な納得を感じた。

敵陣に乗り込んでおいて、気絶しているのだ。

捕らえられて監禁されていようが、殺されてここが地獄であろうが。何が起きてもおかしくは無かった。

しかし、聞いたことの無い少女の声が上から降ってきたことには、さすがに驚いた。

「あっ、まだ寝ててもいいーから」

少女は慌てて起き上がろうとした俺の体を無理矢理押さえつけ、力づくで寝かせる。

（この子は、さっき俺が起きたときにもいたな。）

視界がハッキリしなくて、あの時はただただ必死に「胡蝶の里へは連れて行くな」と呟いていたのだが、聞こえたのだろうか？

飛び起きたとき、ふとそんなことを思い、再び寝かせつけられようとされ、抵抗しようとした。

たかだか、少女の力だ。そんなもの特に問題は無く跳ね除けられたが、その時は余程衰弱していたのだあろう。

少女の手すら払いのける力が残っていないく、あっけなくも、再び寝かせつけられてしまった。

それに自分でも少し、起きなくてもいいかな？と安堵していた部分もあった。

少女の声には殺気も何も感じられず、ただ純粹に言葉どおりの感情が込められていた。

そんな、気の抜けた声に、どうすれば警戒心を強く持てるのか、もし誰か知っていたのだとしたら、教えてほしかった。

「・・・ここは？」

「んー。あなたが気絶してたところからもう少し林の奥に入っ

ただけのところ」

「・・・今は、夜なんだな」

うん？と少女は小さく首を傾げたが、彼女の背後には満月が浮かんでいた。

逆光で、顔は良く見えなかったが、髪の毛が鮮やかなオレンジ・・・と表現すればいいのだろうか？月明かりに透けて輝く少女の髪はとても印象的で、どこか幻想的でも合った。

それは、まるで現実の存在ではないことを、主張するかのように。

「・・・君、名前は？」

「ユノ！」

うるさくはない程度の、しかし弾んだ声が返ってくる。

ずっと聞かれるのを待っていたかのように、素早く返答する様は少し、微笑ましいものでもあった。

「ユノ・・・ね。うん、覚えた」

「・・・ねーね。私も聞いていい？」

今にも、喋りだしそうなうずうずした雰囲気はこちら側にも、手に取るように分かった。

「・・・いいよ」

少しだけ笑って、俺は返答して。

そして、すぐに後悔した。

もし、彼女が胡蝶の里の人間であれば。

そして、次の質問が俺の予想通りのものだったとしたら。

今、心を少しだけでも許した少女の場合によっては武器を構えなければいけないことを。

俺は、思い出して後悔した。

しかし、いった言葉を取り消すことは不可能だった。

ユノと名乗った少女は、ゆっくり、言葉を捜しながら質問してきた。

「あなたは・・・誰？」

瞬間、やっぱり。と、心の中で溜息をついた。

あなたは誰？

それは、自分も身元が一言で分かってしまう恐ろしい言葉だ。簡単に答えるわけにもいかずに、取り敢えず少し質問から外れたことを言う。

「俺は、まさきよう」

「・・・そっか！」

最初はきよとした顔をしたものの、少し考えて納得したのだろう。小さく頷き俺の顔を覗き込むことをやめて、体の位置を少しずらし、ユノも俺の隣にころんと、仰向けにねっころがった。

「んー・・・。でも、ちょっと長い名前かもね」

「そう？・・・じゃあ、好きなふうと呼ぶといい」

挑戦じみた笑いを含ませながら、俺はユノに言う。
隣ではしばらく悩むような唸り声が聞こえる。

「『まさ』・・・？それとも、『きよう』？うー。どっちも、ピンと来ないかも」

「でしょ？だから、フルネームのほうが俺はあっているのさ」
なんだ、だからあんなこと言ったのか。

そう思っていることが、簡単に伝わってくるような拍子抜けした声で、軽くユノは笑って俺の言葉に賛成した。

「そうだねー。じゃ、『まさきよう』でっ！・・・まさきよう、もう少し寝ててもいいよ。朝になったら起こしてあげる」

「・・・分かった」

意識が戻ってはいいたものの、体力までは回復していなかった俺は、ユノの言葉に甘えることにした。

しばらくして、そろそろ意識を手放すか、辛うじて絡めているかというトキに、ユノが横で小さく呟いた。

「・・・まさきよう」

俺は、自分の夢の中での声かと思い、返事はしなかった。

ユノはそれを確認したかのように、言葉が続ける。

「まさきょうの瞳の色は、綺麗な灰色と、カッコイイ漆黒だねえ。私、その色好きだよ。漆黒は星が綺麗に見える夜の空みたい。灰色は、夜の空に浮かぶ月と遊んでる雲の色みたいだもん」

いきなり、何を言い出すのか？と、内心凄く驚きながら、それでも睡魔に負け意識の絡めを解いてしまった。

朝、見た彼女の笑顔に、その驚きを質問とすることは出来なかった。ただ、ユノがもう一度、顔を覗き込んできて言った。

「うーん、やっぱり綺麗だねえ」

「綺麗？」

そして、笑った。

「うん、綺麗だよ」

聞いたら、今この瞬間すらなかったものにされそうだと。あの時、僅かにでも思ってしまったことが恐怖となって。

昨日の、言葉の真意を改めて聞く事はできなかったけれど。

でも、ユノ。

俺は、君が褒めてくれた。笑いかけてくれた。この瞳を。

そして、片方だけでも同じ色を持つこの色彩を。

たとへ、呪いと謳われても。

もう、嫌うことは出来無いと思うんだ。

たとへ、敵だとしても。その言葉だけは、素直に受け入れておこうと、あの時はただ必死にそれだけ思って笑っていたかったから。

瞳の色はソラの色で（後書き）

今回は番外編ってことで、少々文章の書き方を変えてみました。（・
・・こう、軽めに？）

前回（第3話）で、本当はもう少しまさきょうさんを暴れさせよう
と思っていたのですが、いかんせん傷が重症だったので、控える
と言う残念な結果に終わってしまったため、一種の作者の挑戦とい
うか、リベンジしてみた部分があります（苦笑）。

まあ、またここから本編に戻る予定なので、見捨てないで気が向い
たお暇なときにでも読んでみてください、もの凄く嬉しいです。
色々予定が重なっているのですが、多分来月中旬ごろに2〜3話ほど更
新できると思います（多分）。

ではでは、いつも見放さずにこの小説を呼んでいただき本当に有り
難うございます。そして、これから、どうか読んでください。

つきましては、ご意見・ご感想・誤字脱字等の指摘・叱咤激励等々
ありましたら、評価もしくはコメントのところに送ってやってくだ
さい。宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3381a/>

翳した掌

2010年10月13日23時15分発行